

未来時に「事実性」はあるのか

－英語における直説法と接続法－

松 瀬 憲 司

Is There Any 'Factuality' in the Future Time?: The Indicative Mood and the Subjunctive Mood in English

Kenji MATSUSE

(Received October 1, 2013)

It seems quite strange that the future time reference, which is considered to be obviously non-factual, has been dealt with in the indicative mood, where 'factuality' modality is designated, since the Greco-Roman period; neither ancient Greek nor Latin, though both were highly-inflected languages, had the future tense in the subjunctive mood, the main function of which is to mark 'non-factuality' modality, and even now neither do Modern Greek and many Latin-descendent Romance languages. Apparently, this practice is thought to be seen in Present-day English too, but it will be more appropriate to say that since we no longer have any morphological mood distinction in Present-day English, the future time reference need not be considered being involved with the indicative mood, but should rather be treated as having several marked constructions with special items for representing non-factuality. Thus the indicative mood as verbal inflection is irrelevant to Present-day English; we just have unmarked/default finite verbal forms for the present or past factuality.

Key words: indicative mood, subjunctive mood, future time reference, factuality, modality

1. はじめに

Portner (2009: 1-5) は「法性 [modality]」を以下の (1a) のように定義し、さらに、文／節よりも小さい構成素の法性 [sub-sentential modality] について (1b) のように述べている。

- (1) a. Modality is the linguistic phenomenon whereby grammar allows one to say things about, or on the basis of, *situations which need not be real*.
- b. I also include verbal mood (in particular, *the indicative* and subjunctive) within sub-sentential modality, since contemporary theories view mood as largely determined by sub-sentential modality higher up in the structure. (emphases added)

また、現代英語 [Present-day English: PDE] について、文／節の法性 [sentential modality] のうち、未来時に関わるものとして、典型的には「助動詞 will を含む文」であることを指摘している。

ここで、動詞の語形変化として現れ、話者の発話内容に対する心的態度を表示する「法 [mood]」のうち、「直説法 [indicative mood] (2a)」と「接続 (仮定) 法 [subjunctive mood] (2b)」の定義を寺澤 (2002) により確認しておく。

- (2) a. 法の一つで、動詞が表す動作・状態を事実として述べるもの
- b. 法の一つで、動詞が表す動作・状態を事実として述べるのではなく、話者の心中で考えられたものとして述べるもの (傍点筆者)

一般に、未来に起こることは、まだ起こっていないわけだから (real ではないので) 我々は「推測」するしかなく、原則的にはそれを発話時の事実として捉えることには無理がある。つまり、未来は本質的に「話者の心中で考え

られたこととして述べられる」と言っている。だとするならば、上記の定義に従えば、その動詞形態は接続法で処理されなければならないはずである。法がその動詞形態に反映される、高度屈折言語である古典ギリシア語に関して、古川（1958: 144）も、「接続法は本質的には未来に関するもので、未来の動作を想像したり、仮定したりするのが本義」（傍点筆者）と述べている。しかし実際には、古典ギリシア語には、「接続法未来」形という動詞形態は存在しない。あるのは「直説法未来」形だけである。同じことは古典ラテン語にも当てはまる。のみならず、その屈折体系を少なからず継承した子孫である現代ギリシア語やロマンス諸語においても依然としてそうである。これは接続法自体に既に未来の意味が含まれているので、接続法は敢えてそういう時間指示を持たなかったという考え方も可能だが、では、事実を述べるとされる直説法で時間軸上「事実」たり得ない未来の事柄を指すことができるのはなぜか、という素朴な疑問は払拭されない。さらにおもしろいことに、このことは上で見たように、その祖先を一にするとは言え、およそ西洋古典語とは似ても似つかなくなってしまう PDE においてもまた当てはまると思われるのである（確かに、ラテン語などと違って、元々ゲルマン語には現在と過去の二時制しかなく、独立した「未来時制」はなかったが、未来時の指示は当然のことながら可能であり、接続法もまた存在した）。未来を表す際に典型的に使用される「助動詞 will を含む文」は少なくとも形態上は、伝統的には直説法と捉えざるを得ないからである。

本稿では、そこで、英語における「直説法によって未来の事象を表す」という仕組みについて、その接続法との関わりも含めて通時的に考察してみたいと思う。主な議論点として、

- (3) a. そもそも法とは形態論的区別なので、形態の単純化が極度に進んだ PDE では法の区別は不要なものではないか。
- b. それでも敢えて PDE で法を区別するとしたら、法助動詞は上記のように直説法と呼べるのか。
- c. むしろ PDE では、法助動詞を接続法と見なすことで、will/shall の未来性を非事実として処理できるのではないか。
- d. PDE で法の区別があるとして、直説法過去形（と同形）が接続法を表すことの意味は何か。話者の持つ心理的距離が関係しているのか。
- e. PDE においては、直説法／接続法という二分法ではなく、事実に [factual] 法性 vs. 非事実に [non-factual] 法性という理解の仕方では十分ではないか。
- f. さらに、法の区分である接続法を捨て、非事実に法性として括れば、もう一つの法「命令法」をも包含できる利点があるのではないか。
- g. PDE では、法性の記述に「原形（不定詞）」という概念がどこまで利用できるか。

を挙げておこう。本稿の構成は次の通りである。次節では、まず西洋古典語（ギリシア語・ラテン語）における直説法・接続法と未来事象の指示との関わり合いを概観し、3 節で、Mitchell & Robinson (2012⁸) により、古英語 [Old English: OE] における、未来表示に関わる直説法と接続法の振る舞いを確認した上で、4 節では、その OE と比較しながら、PDE での実態を主に形態的側面から分析し、上記議論点をあらためて考察する。そして 5 節で議論全体をまとめることにする。

2. 西洋古典語（ギリシア語・ラテン語）における直説法と接続法

この節では、主に古川（1958）と中山（2007・2009）に依りながら、古典ギリシア語および古典ラテン語における直説法と接続法について考えてみる。

まず、以下に古典ギリシア語の動詞 *παιδεύειν* [= to educate/rear]¹⁾ の直説法能動態が持つ時称（＝時制＋相）を、1 人称単数形を例として挙げる。（4b）が完了系時称であり、（4a）がそれ以外の時称である。

- (4) a. 現在 (*παιδεύω*)・未来 (*παιδεύσω*)・不完了過去 (*επαιδεύον*)・アオリスト (*επαιδεύσα*)
- b. 完了 (*πεπαιδευκα*)・過去完了 (*επεπαιδευκη*)・未来完了 (*πεπαιδευσομαι*)

なお、古川（1958: 94）によれば、未来完了形は「中間受動態」にのみ存在し、能動態にはない。

そして、同じくその接続法能動態の 1 人称単数形は以下の（5a）の通りである。さらに、古典ギリシア語には、接続法だけでなく「希求法 [optative mood]」もあるので、そこでの時称も（5b）に挙げておく。

- (5) a. 現在 (*παιδεύω*)・アオリスト (*παιδεύσαι*)・完了 (*πεπαιδευκω*)
- b. 現在 (*παιδεύοιμι*)・未来 (*παιδεύσοιμι*)・アオリスト (*παιδεύσαιμι*)・

完了 (*πεπαίδευκοιμι*)・未来完了 (*πεπαίδευσοιμην*)

希求法には、接続法には無い未来および未来完了形が確かにあるが、古川 (1958: 153) では、それらは「間接話法」の場合以外はほとんど用いられないと指摘されている。

上記 (4) (5) を比較して、確かに古典ギリシア語では、動詞の未来 (完了) 形は直説法に存在し、(接続法の一部とも考えられる希求法にはあるにはあるがごく限定的であったということなので) 接続法には無かったことが分かる。しかし、1 人称単数形では、(それ以外の人称・数では微妙に異なる形態をとるのだが) 直説法未来形と接続法アオリスト [単純過去] 形がまったくの同形となっている (ゴチック体で表示している) 点はなかなか興味深い事実である。もっとも、未来形とアオリスト形には共通して <-σ-> (/s/ 音) が挿入されるという点では、元々両時称はある種の共通性を持っていたとも言える。さらには、直説法現在形と接続法現在形においても 1 人称単数形がまったくの同形となっている点も指摘しておく (ゴチック体で表示。ここでもまた、それ以外の人称・数では微妙に異なる形態をとる)。

次に、古典ラテン語を見ていく。動詞 *amare* [= to love] の直説法能動態未完了系 3 時称を (6a) に、同完了系 3 時称を (6b) に、同じく 1 人称単数形を例として挙げる。

(6) a. 現在 (*amo*)・未完了過去 (*amabam*)・未来 (*amabo*)²⁾

b. 完了 (*amavi*)・過去完了 (*amaveram*)・未来完了 (*amavero*)

これに対して、「要求・願望・可能性・非現実など、主観的な感じのこもった法 (中山 2009: 46)」としての接続法では、以下のように「未来形」がすっぽりと抜け落ちている。(7a) には、未完了系 2 時称を、(7b) には、完了系 2 時称を示す。

(7) a. 現在 (*amem*)・未完了過去 (*amarem*)

b. 完了 (*amaverim*)・過去完了 (*amavissem*)

なお、上記 (6) (7) から分かることについて付け加えると、中山 (2009: 57) に指摘されているように、直説法未来完了形に関しては、1 人称単数形以外は接続法完了形とまったくの同形になる (例えば、2 人称単数形はどちらも *amaveris*)。ここでもまた、古典ギリシア語の場合と同じように、直説法と接続法の部分的「相互乗り入れ」を見ることができる。

一般に接続法が典型的に現れると考えられるのはやはり、PDE で言えば、if (ラテン語では *si*, ギリシア語では *εἰ/εἰ av*) を使った条件文であろうことは想像に難くない。そこで以下のような古典ラテン語の 3 つの条件文を取り上げてみる。それらは、事実の (論理的) 条件文 (8a) (または可能的 (想定的) 条件文)、現在の事実に反する条件文 (8b)、そして過去の事実に反する条件文 (8c) である。

(8) a. *Si caelum serenum est, in horto laboramus.*

[= If (the) weather fine **is**, in (the) garden **we-work**.]³⁾

b. *Nisi aegrotus essem, te visitarem.*

[= If-not sick **I-were**, you **I-would-visit**.]

c. *Nisi aegrotus fuisset, te visitavisset.*

[= If-not sick **I-had-been**, you **I-would-have-visited**.]

そして、(8a-c) のそれぞれに使用されている法および時称は次の (9a-d) の通りである。

(9) a. *si* 直説法 + 直説法 (または *si* 接続法 + 接続法⁴⁾)

b. *si* 接続法未完了過去 + 接続法未完了過去

c. *si* 接続法過去完了 + 接続法過去完了

これを見る限り、古典ラテン語でも、PDE での一般的条件文や仮定法 (= 接続法とするならば) の文と同じ法構成になっているとも考えられる。ちなみに、その (9a-c) に対応する古典ギリシア語の条件文の法構成は次の (10a-c) のようになる。

(10) a. *εἰ* 直説法 + 直説法または *εἰ av* 接続法 + 直説法

b. *εἰ* 直説法未完了過去・過去完了 + 直説法未完了過去・過去完了 *av*

c. *εἰ* 直説法未完了過去・アオリスト・過去完了 +

直説法未完了過去・アオリスト・過去完了 *av*

(9) (10) より分かることで特筆すべきことは、古典ギリシア語では、事実反する仮定を条件とする場合でも、一貫して事実を表す直説法が使用される点である。このように、条件節に、*εἰ* 'if' と共に直説法過去系の形態を使い、主節に特別なマーカー (*av*) を使うことですべて直説法内で処理している点では、実は古典ギリシア語は、

むしろ PDE の実態である「条件節：if 直説法と同形+主節：would/should…」に酷似していると言ってもいい。

以上、雑駁な観察ではあるが、ここでまとめておくと、接続法という固有の形式を持っていた、高度に屈折する西洋古典語においてでさえ、なぜか未来の指示は事実を表す直説法が担うのが常であったようで、非事実的法性の表示がその主たる機能である接続法の守備範囲ではなかったということになる。これはある意味非常に奇妙なことではあるが、古典ギリシア語にしても古典ラテン語にしても、一部ながら直説法と接続法が形態上相互に乗り入れていたという事実を考えると、接続法の法性が直説法に「染み出す」ような現象はまああったことであり、未来の指示がその典型であったのかもしれない。

3. 古英語における直説法と接続法

では、PDE の先駆者たる OE での状況はどうであったのか。OE は PDE と違い、むしろ西洋古典語的特徴を多く備えていたことは言うまでもなく、直説法も接続法も形態的に判別されていた。Mitchell & Robinson (2012⁸: 71) が定義する OE における直説法と接続法は次のようになっている。

- (11) a. INDICATIVE: presented as a fact, as certain, as true, or as a result which has actually followed
or will follow (emphasis added)
b. SUBJUNCTIVE: mental attitude towards the content; condition, desire, obligation, supposition,
perplexity, doubt, uncertainty, unreality

(11a) の定義中、as a result which will follow の部分から明らかなように、見事に未来が直説法に入り込んでしまっている。実はそれもそのはずで、OE では、直説法「現在」の動詞形態は (12a) のように未来だけでなく、(12b) のように「未来完了」までも表すことができたのである（この節の、以下に挙げる例文は全て Mitchell & Robinson (2012⁸) に依る）。

- (12) a. *ƿas flotmenn **cumaþ***. [= These seamen **will-come**.]
b. *Se þe ƿæt *gelæsteð*, *bið* him lean gearo.*
[= Whoever that **shall-have-done**, **will-be** for-him (a) reward ready.]

これは、未来への連続性が強く感じられる、以下のような「永遠の真理 [gnomic]」が be 動詞の直説法現在形で表されたことにも関連しているのだろう。

- (13) a. *Wyrd *bið* ful aræd*. [= Fate **is** quite inexorable.]
b. *ƿonne *bið* heofona rice gelic ƿæm tyn fæmnum.*
[= Then **is** of-Heaven (the) Kingdom like unto-the ten virgins.]
c. *Heofona rice *is* gelic ƿæm hiredes ealdre.*
[= of-Heaven (the) Kingdom **is** like unto-the of-household leader.]

ただ、上記のような未来指示は通常 2 系列ある OE の be 動詞直説法現在形形態のうち、*bið* のような <b-> で始まる系列が担っていたとされるが ((12b) および (13a, b) 参照),⁵⁾ Mitchell & Robinson (2012⁸: 108) は、(13c) のように、もう一つの系列（この場合は is）も使用可能であったことを指摘している。もちろん PDE では、be と been を除いて前者の系列は消滅してしまっているのも、後者の系列の現在形のみが永遠の真理を表さざるを得ない。

これに対して、接続法は、OE でもその名の通り従属節に現れることが多かったが、主節においても以下のような「祈願文」でしばしば用いられた。まだ起きていない、これから起こることを願うわけだから、接続法が使用されるのは当然であろう。

- (14) a. *Abreoðe his angin*. [= (May) **fail** his enterprise.]
b. *God ƿe *sie* milde*. [= (May) God to-you **be** merciful.]

次に、接続詞 *ƿæt* 'that' に導かれた従属節における動詞の法性についてだが、主節の動詞が「命令」などの願望・要求を表す場合は、通常 (15) のように「接続法現在」が使用された。PDE の用法（特に American English）にその名残を見ることができるよう、願望・要求等はまだ達成されていない非事実だから、この接続法の使用もまた当然であろう。

- (15) *Ic ðe *bebiode* ðæt ðu do*. [= I to-you **command** that you **do**.]

しかし、それに加えて OE では、事実を表す直説法でさえも、「過去形」(16a) も「現在形」(16b) も共に使う

ことができたらしい。

- (16) a. He bebead Tituse his suna *þæt* he *towearp* þæt templ
[= He commanded to-Titus his son that he **destroyed** the temple]
b. and ðurh ðine halige miht tunglu genedest *þæt* hi ðe to *herað*.
[= and through your holy might stars (you-) compel that they you to **listen** (= **worship**).]

Mitchell & Robinson (2012⁸: 71) によれば、望まれた行為が実際に起こった（「結果」が生じている）ことを強調する場合、直説法が現れるとしている。確かに、命じた結果その行為が起こった、上記（16a）の「過去形」*towearp* にはこの説明は当てはまるだろうが、（16b）の *herað* は「現在形」であり、まだその結果は生じておらず、主節動詞 *genedest* (< *geneodan*) も現在形であることから、通常ならば接続法が使用されるべきところであつたろう。しかしもう既に OE のこの時点で、主節の動詞の「意味」（この場合は「要求・使役」）が従属節の非事実性をも担い、当該の従属節の動詞はデフォルト形である直説法で済ませるという合理的流れが始まっていたとも考えられる。

同様に、「陳述」を表す場合、話者がその陳述内容の事実性に確信を持っていたり、その真実性を話者が請け合うときは、（17）のように従属節では直説法が使用された（（17a）ではその現在形、（17b）では過去形がそれぞれ使われている）。

- (17) a. Ic wat *þæt* þu *eart* heard mann.
[= I know that you **are** (a) hard man.]
b. Þonne wite he *þæt* God *gesceop* to mæran engle þone þe nu is deofol.⁶⁾
[= Therefore would-know he that God (has) **created** to (a) great angel the (one) who now is (the) devil.]

しかし、同じ従属節で陳述を表す場合でも、それが未来に起こることについて話者に確信がないとき（18a）や、他人の陳述内容の真実性を話者が請け合うことができないとき（18b）には、接続法が現れると言う。（18c）では、接続法を使った前段の陳述が、直説法を使った後段の等位節で明確に否定されていることから、その非事実性が強調されている。

- (18) a. Hit wæs *gewitegod* *þæt* he on ðære byrig Bethleem *acenned* *wurde*.
[= It was prophesied that he in the city Bethlehem (be) born **would**.]
b. Be þæm Theucaleon wæs *gecweden* ... *þæt* he *wære* mincynne tydriend swa swa Noe *wæs*.
[= About that Deucalion (it) was said ... that he **were** mankind propagator as [as] Noa was.]
c. Nu cwædon *gedwolmen* *þæt* deofol *gesceope* sume *gesceafta*, ac hi *leogað*.
[= Now said heretics that (the) devil **created** some creations, but they lie.]

次の（19）は、前段の接続法で不確実なことを述べ、後段の直説法で事実を述べるという、その両者の使い分けがよく分かる例である。しかし、その PDE 訳では、（19b）のようにどちらの場合にも *was* が使われ、法の区別は既に失われてしまっている。

- (19) a. Ne sæde *þæt* halige godspel *þæt* se rica reafere *wære*,
[= Not said the holy gospel that the rich (a) robber **was**,]
ac *wæs* uncystig and modegode on his welum.
[= but **was** mean and exulted in his wealth.]
b. The holy gospel did not say that the rich man *was* a robber, but that he *was* mean and exulted in his wealth.

ところが、OE においても、ことはそう単純ではなかったようだ。（20a）のように直説法が非事実を述べることもあるかと思えば、（20b）のように接続法がむしろ事実を述べる場合もあるのだ。

- (20) a. And gif hit gelimph *þæt* he hit *find*. [= And if it happens that he it **finds**.]
b. Mine gebroða, uton we geoffrian urum Drihte gold,⁷⁾
[= My brothers, would-go we (= let us) to-offer our Lord gold,]
þæt we andettan *þæt* he soð Cyning sy, and æghwær *rixige*.
[= (so) that we to-confess that He (the) true King **be**, and everywhere **rule**.]

Mitchell & Robinson (2012⁸: 72) は、次の（21）では、*geseawe* が接続法過去形になっているが、これは Augustine が Stephen のコメントに疑念を投げかけているからと言うよりむしろ、形態上、主節の *cwæde* (<

cweþan) という接続法過去形によって牽引されたこと (attraction) と, cweþan 'to say' と類似した意味を持つ cyþan 'to proclaim/utter' は従属節の陳述に直説法の動詞を取ることを好むが, cweþan は接続法の動詞を取ることを好むという動詞の指向性に起因するとしている. この従える法の対比は, 元々 cweþan が I (think and) give it as my opinion という意味を表したのに対して, cyþan は I (know and) make it known を表したことから生じていると言う.⁸⁾

(21) Se wisa Augustinus ... smeade hwi se halga cyððere Stephanus cwæde þæt he geseawe

[= The wise Augustine ... enquired why the holy martyr Stephen said that he saw]

mannes bearn standan æt Godes swyððran.

[= man's son to-stand at God's stronger (= right hand.)]

ここで議論をまとめよう. OE においては, 動詞形態上, 直説法と接続法の区別は歴然となされていたが, それらが担う「事実」と「非事実」という意味的部分に関しては, 原則はあるものの, 既にかなり流動的な側面も持っていたようだ. 特に話し言葉では, この傾向はさらに加速していた可能性が高い.⁹⁾ つまり, 現在我々が目にすることができる OE は, 書き言葉であるために, 直説法と接続法の混交がこの程度に抑えられていたとも考えられる. そして書き言葉であるが故に, 上記 (21) で指摘されているように, 従属節における法の選択は特に, 主節動詞の法形態や法指向性による牽引も見られ, 純然たる意味による区別と言うよりは, ある意味, 機械的な形式上的一致 [concord] で処理されていた可能性が高いとも言えそうだ. さらに, 本稿で特に注目している「直説法未来」についても, OE ではそもそも直説法「現在」の時間指示が未来にまで及ぶことが常態として可能だったことを考えれば, 発話時点での事実性はないものの, 「現在の延長線上の存在」としての未来という捉え方は容易になされ得ることになり, 上述のような意味による形式の区別を越えた部分で, 未来は直説法で処理されていたとも考えることができる.

4. 現代英語に直説法と接続法の区別は必要か

法とは法性を体現する動詞の語形変化であることを考えると, 前二節で行った議論に共通する点は何かと言えば, 法を形態的に区別する, (高度に) 屈折する言語においてでさえ, 法性の表示は法のみで完全にカバーされているわけではないということである. 動詞がいくら語形変化をしても, 直説法形と接続法形が同一になれば, 法性が特定できないからである. では, PDE における法の有り様をどのように捉えるべきなのか, 本節で改めて考えたい.

下表 (22) には, OE の一般動詞 bindan 'to bind' と be 動詞 beon/wesan 'to be' の語形変化を, その PDE 形と対比させる形で, 伝統的 3 つの法に渡って提示した (PDE に対しても「仮定法」ではなく「接続法」と表記する). 表中, イタリック体の語形は原形 (不定詞) と同形であることを, また丸括弧内の語形は直説法形と重複した形を使用していることを示している. 角括弧内の表記はオプションである. そしてここで注意すべきは, 一般動詞 bindan は強変化動詞なので, 直説法過去単数形と接続法過去単数形は形態上重複しないが, 弱変化動詞の場合は, 例えば hieran 'to hear' は, 直説法過去単数形が 1 人称 hierde, 2 人称 hierdest, 3 人称 hierde であり, 接続法過去単数形が全人称で hierde なので, 直説法と重複するものが出現してしまい, 法を明確に区別できるのは単数形では 2 人称だけという点である. この違いを, 表中では * 印を付けて示している.

(22)

				一般動詞		be 動詞	
				OE	PDE	OE	PDE
●非定形 [原形 (不定詞)] :				bindan	bind	wesan, beon	be
●定形 :							
▼直説法	現在	Sg.	1st	binde	bind	eom, beo	am
			2nd	bindest/bintst	bind	eart, bist	are
			3rd	bindeþ/bint	binds	is, biþ	is
	過去	Pl.		bindaþ	bind	sind[on], beoþ	are
			1st	band	bound	wæs	was
			2nd	bundest	bound	wære	were

		3rd	band	bound	wæs	was
	Pl.		bundon	bound	wæron	were
▼接続法	現在	Sg.	(binde)	[Aux](bind)	sie/sy, (beo)	[Aux] be
		Pl.	binden	[Aux](bind)	sien/syn, beon	[Aux] be
	過去	Sg.	1st	bunde*	(wære)	(were),(was)
			2nd	bunde	(wære)	(were)
			3rd	bunde*	(wære)	(were),(was)
		Pl.	bunden	(bound)	wæren	(were)
▼命令法		Sg.	bind	(bind)	wes, (beo)	be
		Pl.	(bindaþ)	(bind)	wesap, (beoþ)	be

まず、直説法形と接続法形に注目してみる。直説法形をデフォルト形とするならば、一般動詞に関しては、OE では、接続法現在単数形（及び弱変化動詞の場合には、接続法過去単数形）のみが直説法との重複形として使用されていたことになるが（cf. 古典ギリシア語）、PDE の場合、接続法形は全て直説法形と重複してしまっている。つまり、単数形も複数形もその法性を動詞形態で判断できない状況にあるのだ。OE における接続法の活用語尾は単数形 <-e>、複数形 <-en> という至ってシンプルなものであったので、PDE では、それが音声的摩擦により消滅してしまっており、結果として直説法形との重複形を多数生み出すことになったのであろうことは想像に難くない。

次に、be 動詞だが、OE では、接続法過去単数形のみが直説法と重複して使用されていたが、PDE では、接続法過去形は全て直説法形と重複している。ただし、人称によっては、直説法形とは違う形態と組み合わせることで、接続法用法を提示することができるものもある（OE における、I/he wære といった 1・3 人称単数形や PDE における、I/he were といった 1・3 人称単数形。しかし、口語 PDE では、直説法と同じ I/he was となり、この区別は消滅する）。

一方、とりわけ接続法現在形に目を転じてみると、OE の場合、一般動詞や <b-> 系列 be 動詞では一部直説法や原形（不定詞）との重複があるが、全体的に OE・PDE 共に接続法性を示す独自の形態を持っていると言っている。ただ、PDE の場合、その独自の形態はすべて、原形（不定詞）と同形である点と、いわゆる法助動詞 [modal Aux[iiliary]] をオプションとして使用できる点で OE とは大きく異なっていると言わねばならない。

このように見てくると、OE は、binden や sie/sy といった、少なくとも直説法形とは明らかに違う接続法形を確実に保持していたという限りにおいて、形態上接続法の存在意義は保たれていたというべきだが、PDE では、非定形である原形（不定詞）be の使用を除いて、すべて定形接続法形は直説法形と同一である点を考えると、PDE にわざわざ直説法と区別する接続法を設定する必要は当然ないことになり（児馬（1996: 60-64）も参照）、上記（3a）で示した「そもそも法とは形態論的区別なので、形態の単純化が極度に進んだ PDE では不要である」という見方は肯定されうるだろう。

であれば、続く（3b）～（3e）の視点に対しては、次のように考えてはどうだろうか。

- (23) a. 動詞形態的には、つまり法の種類としては、直説法と接続法を区別する必要はないが、それぞれが担う「事実的」対「非事実的」という法性の区別は依然として必要である。¹⁰⁾
- b. 直説法／接続法という二分法そのものを破棄すると、「法助動詞 will/shall は形態上直説法であるが、法性的には非事実を表すので接続法である」とか「直説法過去形が接続法として使われる」といったある意味混乱した言説を避けることができる。
- c. 非事実的法性を表す際には、それに対する話者の心理的距離が、法助動詞、条件節内の「過去形」、そして「未来」を表す様々な形式として定形動詞の形態に反映されるだけと考えられる。¹¹⁾

次に、命令法についても考えてみる。まず、OE の一般動詞だが、確かに命令法複数形が直説法複数現在形と重複しているが、命令法単数形は bind という独自の形式を持っていたし、be 動詞の場合も、<b-> 系列 be 動詞では直説法現在形と全く重複しているが、wes/wesap という <w-> 系列を独自に持っていたことが分かる。したがって、OE においては、動詞形態的区別としての命令法を設定することの意義は認められるが、PDE の命令法形は、原形（不定詞）または定形直説法 2 人称現在形と考えられ（児馬（1996: 65-67）も参照）、そこに独自の形態は存在していないので、その動詞形態が定形であれ、非定形であれ、命令法という「法」を殊更設定する必

要はない。(3f)で述べたように、「法の区分である接続法を捨て、『非事実的法性』で括れば、もう一つの法『命令法』をも十分に包含できる」のである。

ここでひとつ非常に興味深い問題として、(3g)で指摘した、「PDEでは、法性の記述に『原形(不定詞)』という概念がどこまで利用できるか」ということが立ち現れる。¹²⁾ そもそも原形(不定詞)は、定形動詞ではなく非定形動詞なので、それを含むとすれば、非事実的法性の一部である、伝統的な言い方で、従属「節」の接続法現在形や命令形はいわゆる「節」たり得ないことになる。そしてこの微妙な点は、接続法の場合、非事実的法性用法として法助動詞が現れる場合は、それが定形動詞とみなされ、一転して節であると捉えられることである。したがって、ここにもし節としてカテゴリー上の一貫性を持たせるのであれば、例えば、

(24) a. It is necessary that we *be* prepared for the worst.

b. It is necessary that we *should be* prepared for the worst.

(江川 1991³: 251)

(25) a. Mr. Chairman, I propose that we *take* a vote on that next week.

b. I suggest (that) we **not jump** to the conclusion.

(江川 1991³: 250)

(24a)の*be*や(25a)の*take*はいわゆる接続法現在形という「定形」動詞であると解釈し、とりわけ(24b)の原形(不定詞)の*be*とはステータスが違わなければならない。これは一見すると奇妙に思えるが、従来PDEでは、伝統的に直説法過去形を接続法過去形と見なしてきたという経緯からすれば、こういった二重の捉え方をすること自体に特に奇異なところはない。逆に、(25a)のように原形(不定詞)と(直説法)現在形がほとんど形態上重複する一般動詞と違って(唯一区別できるのは3人称単数である)、*be*動詞の場合は、それらが全く重複しないので、むしろ形態上の同一性の方を重視することで、原形(不定詞)がそのまま非事実的法性の一部に使用されとする方がいいのかもしれない。そうすると、(24a)や(25)の従属節は、実際は節ではなく、「疑似節」として「主語+原形(不定詞)句」または「主語+命令用法句」といった捉え方が可能になり、他の原形(不定詞)用法も含めて、原形(不定詞)というカテゴリーで統一的に説明できるとも考えられる。特に、(25b)のような否定文における否定辞*not*の位置規定は、そのみで定形動詞と言うわけにはいかないので(*not*は動詞ではないので)、*we*という主語は確かに存在しているものの、やはりこの動詞形態は原形(不定詞)と捉えられることを示している。¹³⁾

5. まとめ

以上、これまでの議論をまとめると、次のようになる。

高度に屈折した古典語では、法を区別する手だてでは十分すぎるほどあり、その存在意義もまた十分にあったが、完全とまでは言えず、同じ動詞形態が複数の法を表すことも一部だけあった。おそらくそのような形態上の重複という形式面と、直説法現在が未来の事象までも射程に入れることが可能だったという意味的側面とが相まって、有標の接続法ではなく、無標の直説法の中に未来時を設定することが常態化していたのではないかと考えられる。

それに対して、動詞の語形変化が古英語に比べて極めて簡素化された現代英語では、もはや動詞形態としての法を明示することができない状況にあるが、それでも事実的法性は無標の定形動詞デフォルト形が処理し、非事実的法性は、Biber et al. (1999)が言うところの‘stance’ markerとして機能する、*will*などの法助動詞や*if*などの特殊なマーカーおよび、従属節を従える場合でも、*suggest*や*require*といった主節動詞の持つ意味によって過不足無く伝えることができる。このように考えれば、未来時の指示は、典型的には法助動詞*will*というstance markerにより、その非事実的法性を表す有標な構造と捉えることができ、そこには直説法や接続法といった法概念を特に持ち込む必要はないことになる。さらに付け加えれば、非事実的法性を表す有標構造には、時として従属節に(節たり得ない)非定形動詞である原形(不定詞)が現れる。それは別の見方をすれば、今井(2010)が指摘するように、伝統的な命令法を、その動詞を定形動詞ではなく原形(不定詞)と見なした場合、まさにその命令法形が従属節に埋め込まれているとも考えられるわけで、だとすると逆に、非事実的法性を表す原形(不定詞)の一用法として従来の命令法を捉えることもでき、命令法自体を法の一つとして別立てにする必要も同時になくなることになる。

註

- 1) 古典ギリシア語のアクセント符号は省略して提示する。
- 2) 未完了過去 (amabam) と未来 (amabo) には、共通して <-b-> (/b/ 音) が挿入されている。これは、古典ギリシア語では、未来形とアオリスト形に共通して <-σ-> (/s/ 音) が挿入されるということとパラレルであるように思われる。古典語の世界では、未来と過去の捉え方にある種の同質性を見出していたのかもしれない。
- 3) 以下、ラテン語や OE の各例文に付与した角括弧内には、PDE による単語毎の逐語訳を記載し、原文の方ではイタリック体で表示されている部分を、逐語訳ではゴチック体で表示している。
- 4) 中山 (2007: 309-310) には、接続法を使う可能的 (想定的) 条件文の例として以下のものが挙げられている。
 - (i) Aequabilitatem vitae conservare non possis, si aliorum naturum imitans tuam *omittas*.
 [= stability of-life to-serve not **it-would-be-possible**, if of-others nature imitating yours **you-would-omit**.]
 PDE においても、固定した言い方では、擬古的な 'if need be' という形で条件節に接続法を使う形がいまだ残存している。
- 5) 4 節の表 (22) で、OE の be 動詞直説法現在形及び過去形の部分を参照のこと。なお、この <b-> 系列 be 動詞は、Trudgill (2010: 6) が引用する Nielsen (1998) によると、明らかに古サクソン語 [Old Saxon] や古高地ドイツ語 [Old High German] の系統に属すると考えられる。ちなみに、母音で始まる、1 人称形 eom や 2 人称形 eart は、ゴート語 [Gothic] や古ノルド語 [Old Norse] の系統に属するという。
 H. F. Nielsen, *The Continental Backgrounds of English and Its Insular Development until 1154*, Odense: Odense Univ. Press.
- 6) ただ、(17b) では、主節動詞の方が接続法現在形となっており、この場合 let him know という意味を表すことになる。ここには接続法が命令法 (的用法) の領域に拡張している現象を垣間見ることができる。
- 7) (20b) の uton we geoffrian urum Drihte gold の部分は、(17b) の wite he 'let him know' のように let us offer our Lord gold という PDE 訳になるが、この uton は、Clark Hall & Meritt (1960, s.v. *wuton*) によれば、witan 'to go' の接続法現在形複数 *wuton* の異形で、1 人称複数主語と共に用いられることにより、let us という命令・勧告 [hortative] を表すことができた。
- 8) しかし、言語活動は常に厳密な論理のみに支配されているわけではないことは、以下の (ii) と (iii) の PDE の例を見るとよく分かった Mitchell & Robinson (2012⁸) は指摘する。
 - (ii) a. I think he *may* come.
 b. I know he *will* come.
 - (iii) a. I think that he *is* without doubt the cleverest boy in the school.
 b. I know he *may be* here in ten minutes, but I can't wait.
 つまり必ずしも「I think that + 接続法」であり、「I know that + 直説法」であるとは限らないのである。また、(iib) より、Mitchell & Robinson (2012⁸) が he will come を直説法の文であると捉えていることは明白である。
- 9) Quirk et al. (1985: 1182) は以下の例を挙げ、特に Br[ish]E[nglish] では接続法の代わりに直説法が使用されることについて言及している。
 - (iv) People are demanding that she *should leave/leave/leaves* <esp BrE> the company.
- 10) そういう意味で、PDE では、接続法ではなく、「仮定法」という呼称の方がよりふさわしく、もっと言えば、既に法たり得ないので「仮定 (法) 的」とでも言うべきであろう。
- 11) (v) のような、いわゆる「確定的な未来の予定」として (直説法) 単純現在形を使うことなどは、まだ現実には事実になっていないことが十分に「事実として」捉えられる特殊な場合と言うことができる。逆に言えば、未来を事実として捉えるからこそ無標の (直説法) デフォルト形が使用されているのである。
 - (v) a. We *leave* Tokyo at 11 p.m. and *arrive* in Kyoto at 8:30 a.m.
 b. Next Christmas *falls* on a Tuesday. (江川 1991³: 224)
 久野・高見 (2013: 9) には、こういったいわゆる直説法現在形を使った未来の表示形式が 6 種類挙げられている。
- 12) 今井 (2010: 158-159) は、動詞の原形のイメージは「まだ行われていない」と定義し、伝統的な仮定法 (接続法) 現在を学校文法では「提案や要求を表す動詞に続く節では動詞は原形になる」というルールで処理することを解説している。
- 13) もし jump を定形動詞と捉えるならば、以下の (vi) のような not の位置が容認されなければならない。
 - (vi) *I suggest (that) we *jump* **not** to the conclusion.

参考文献

- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Clark Hall, J. R. & Meritt, H. D. 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th edition. Toronto: University of Toronto Press.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』改訂三版. 東京：金子書房.
- 古川晴風. 1958. 『ギリシヤ語四週間』 東京：大学書林.
- 今井隆夫. 2010. 『イメージで捉える感覚英文法』 東京：開拓社.
- 児馬修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』 東京：ひつじ書房.
- 久野暉・高見健一. 2013. 『謎解きの英文法－時の表現－』 東京：くろしお出版.
- Mitchell, B. & Robinson, F. C. 2012. *A Guide to Old English*. 8th edition. Chichester: Wiley-Blackwell.
- 中山恒夫. 2007. 『古典ラテン語文典』 東京：白水社.
- 中山恒夫. 2009. 『ラテン語練習問題集』新装版. 東京：白水社.
- Portner, P. 2009. *Modality*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 関本至. 1968. 『現代ギリシア語文法』 大阪：泉屋書店.
- 寺澤芳雄編. 2002. 『英語学要語辞典』 東京：研究社.
- Trudgill, P. 2010. *Investigating Sociohistorical Linguistics: Stories of Colonisation and Contact*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.